

景観変遷から見た城下町の形成と崩壊

——福島県いわき市平の中世の飯野平城を中心にして——

鈴木貞夫

一 はじめに

見慣れた景観は特に注目されない。いつもみているので当然のことと感ぜられるからである。古文書の少ない地方の研究では、地形・道路・水路・耕地の土地割・集落形態を微細に観察すると、ある時代の景観をとりだすことができる。これら歴史的景観を時代各に分類し、地図化して、現在の生活空間を理解することを目的として、いわき市平を調査してきた。その意義は歴史的景観の保全につながるからである。

地形の特色は、第三紀層の丘陵（標高百メートル弱）が広い面積を占めている。この丘陵は最近の開発で住宅地・工業団地に変化しているのも多い。この丘陵が谷頭侵蝕や河川の側方侵蝕により沖積平野の中に岬状に突出している。また、河川に近いこれらの丘陵には表層に礫層で被われて平坦な洪積台地になっているのも多い。この洪積層は立川面に相当するのが多く、標高四〇メートル弱である。

この立川面になるのが飯野平、鎌田、六反田、上野原であり、小単位で分散して分布している。

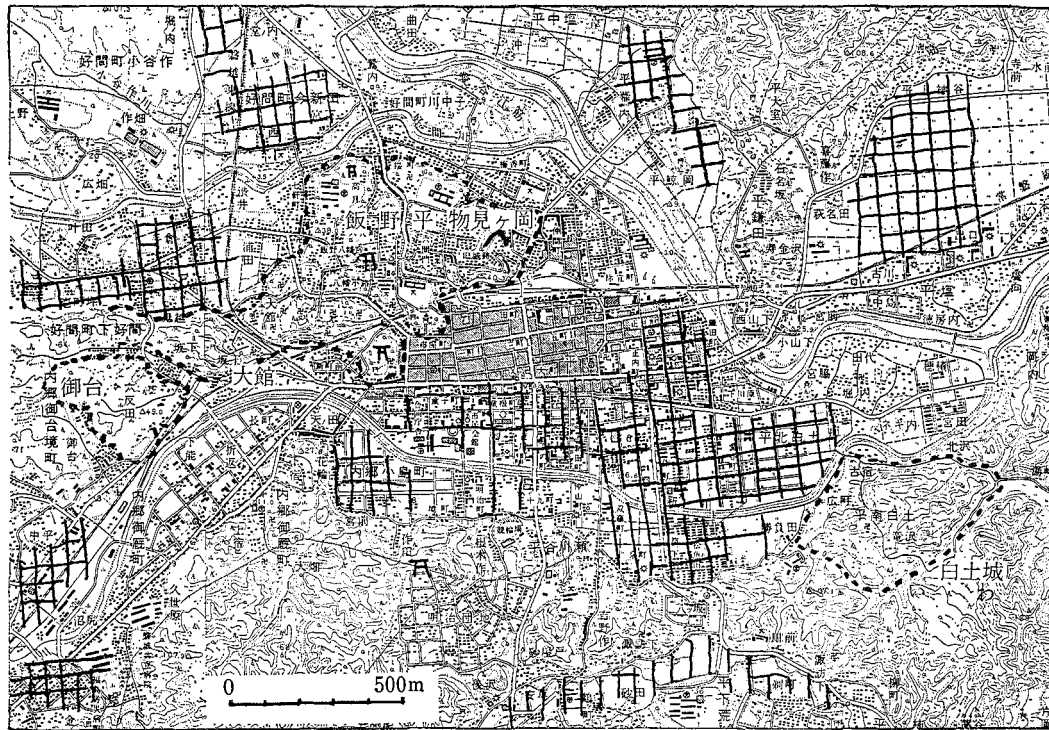


图1 对象地域と条里型地割分布

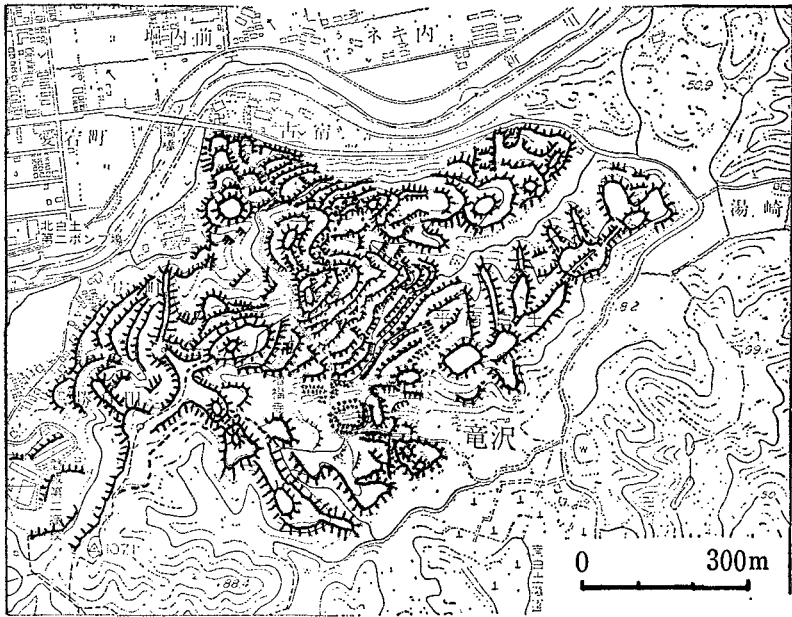


図2 白土城

沖積平野は夏井川、好間川、新川沿いにあつてい
 わき市では面積も広く分布する。そこには自然堤
 防、後背低地が発達するが、新川流域の沖積平野は
 丘陵内に源を発する川なので運搬量も少なく自然堤
 防はみられない。海岸平野は更に下流に位置するの
 で旧浜堤はない。

二 古代の条里制遺構の分布(1) (第1図)

この地区はいわき市内では小規模の条里制地割が
 密に分布する地域である。滑津川の小谷底平野にも
 等間隔の道が並び、条里地割をもち、奈良時代の開
 発が密度が高く施行されたことを示している。条里
 が施行されない城区は現在でも、旧河道があったり
 する氾濫原で洪水の被害を受け易い地域となつて、
 最近まで平の市街地に近いのにもかかわらず都市化
 されないできた。

この条里の特色は、南北の線が七度程西偏して

いるのが多い。すなわち、北白土、中塩、愛谷、今新田、中好間、下好間、赤井にあって、坪の中は長地型である。平の城下町である市街地の南北の道路は明らかに条里の方向に一致している。正方位条里は荒川、小島、谷川瀬に分布するが、必ずしも条里と断定できないものもある。荒川、下好間、中塩、赤井では一部市街地が耕地整理以前に都市化した地域は条里遺構が残存している。

三 白土城（第2図）

戦国大名・岩城氏は伊達・相馬と佐竹の間にあつて、鎌倉時代から関ヶ原の戦いまで長く勢力をもち続けてきた。しかし、館の位置、範囲など今まで殆んど調査されないうきた。

江戸時代⁽²⁾、元禄五年（一六九二年）に書かれた「楯掛墓由来記」によれば、「永享元年」（一四二九）九月二十三日三夜、隆忠公、白土之山城押寄責落玄番殿御切腹、隆忠被遂御念望候、此時隆忠公本城長朝城、白土之山城御越。隆忠、親隆、常隆迄三代白土城御座也（下略）とある。即ち、この白土城を本拠として、いわき地方の統一への道を歩むのである。

この城の位置は平市街地の南に隣接する丘陵にあつて、北には夏井川・新川、南は市営墓地、東は菅波の国魂神社に近い。館の中の数ヶ所ある標高一〇〇メートル内外の頂上からは、いわき市全域の丘陵と中北部の沖積平野は視界に入る好位置にある。規模は東西一キロ、南北九〇〇メートルもある大規模な山城である。

白土城の縄張り

居館は南と東に流れる二つの谷の谷頭部にあって標高五〇メートル内外の段丘面にあり、増福寺の南に位置する。

南の谷（竜沢）は開放された谷なので、空堀、土塁、曲輪などの工夫が凝らしている。すなわち、城主の居館は無居住の農家で土塁と空堀りに囲まれ、庭跡も保存されている。この農家の北から西南部の畑や雑木林の中には宅地跡を思わせる低い曲輪群があって重臣の屋敷跡のように思われる。

この館の特徴は曲輪の発達が著しいことである。この館は一〇〇を越す曲輪の集合であって、曲輪のまわりは急崖で登りにくい。

曲輪の中にはほとんど削平されて、階段状になっている。曲輪のない斜面は傾斜が三七度を越えるが、ほとんど人工相に手を加えた急崖である。その理由は山麓部に畑地、道路、宅地が高くなっているが、その土は斜面を削った土が低い段丘のようになっていいるからである。また数多くある支谷にも曲輪があるが、これも同じ理由によるようである。

南側の丘陵の館において、いくつかある稜線には曲輪もあるが、一メートル位の幅の道が土橋状になっている。その両側は削られて急崖になり、また稜線の先端も切断されて、登りにくくなっている。

虎口は三ヶ所あり、稜線を堀削して、道を曲げて、狭くする。さらに両側の尾根は削平して曲輪とする。その背後に比較的広い曲輪があって枡形の機能をもたせている、この頂上部に近い平五小から虎口にくるまでの道路は曲輪や稜線を通る道路から見通される丘陵の中腹を通っている。

土橋は三ヶ所あり頂上部に多いが、頂上部の曲輪と曲輪を結ぶ機能をもっている。

この館は素朴な作りだが、全体的には手の込んだ攻めにくい構造になっている。

この城は石垣もなく土だけの城だが、鎌倉時代の居館から山城へ移った南北朝期の形態を示している。飯野平城築

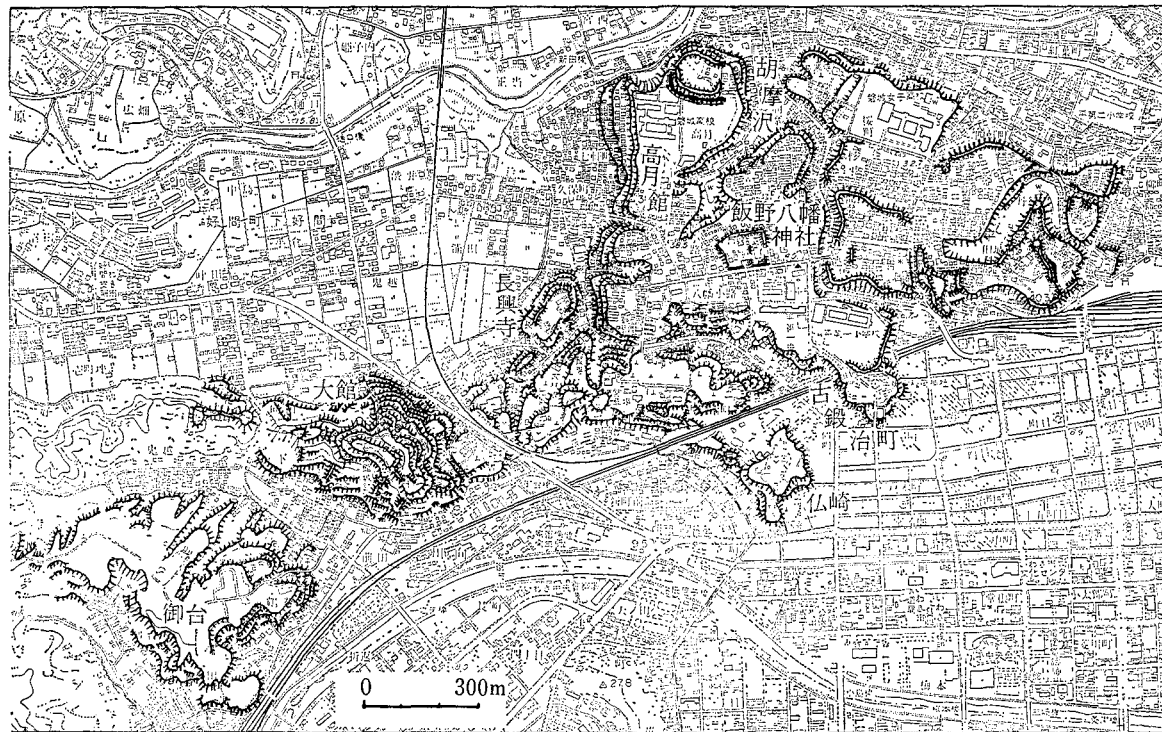


图3 飯野平城

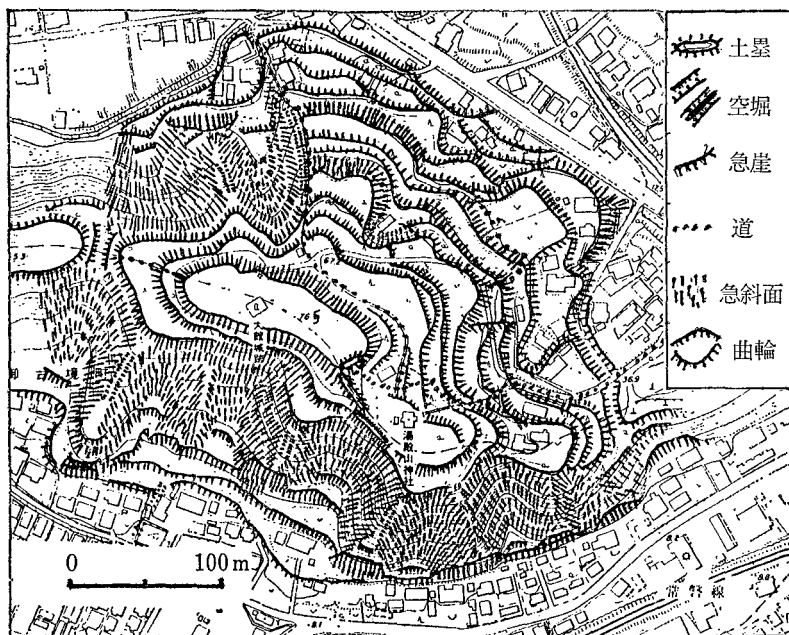


図4 大館（飯野平城の中の）

城前にはここが岩城氏の本拠地であったことはほぼ間違いなようである。

また、この居館付近から白水阿弥陀堂はほぼ六度程南寄りになるが、当時の偏角を考えると真西になる。後述する飯野八幡宮の一の鳥居から三の鳥居を結ぶ線とは直角に交わる。この館と白水阿弥陀堂とは関連するようである。

四 飯野平城（●●●）

「統群書類従」の磐城系図に岩城常隆は(3)「文明十五癸卯年従白土移飯野平」（一四八三年）白土より飯野平へ移るとある。この文の中で、白土を白土城とすると、飯野平城となる。地元では飯野平城とはいわないで、俗称の(4)大館がつかわれている。実際俗称の大館を調査してみると、白土城に比較するとあまりにも規模が小さい。そこで、城の範囲が問題になるが、この飯野平（洪積台地）は住宅、寺

院、学校などになって改変が著るしく古地図もないので、白土城と同じく、崖の斜面を中心に調査を進めた。

その結果をまとめると、まさに大館であって、内郷から平まで連続し、東西三キロ、南北一キロメートルもある。ただ一つの時期の城ではなく、鎌倉時代の高月館、戦国時代の飯野平城、近世の磐城平城と三つの城が合わさってきた城館である。古い順に特色をまとめてみたい。

一 高月館(⑤)とその周辺(⑧)

現在の県立磐城高校、飯野八幡神社とこの周辺地域である。飯野氏の居館(磐城高校の敷地)だが、ここは一つのまとまった館であって鎌倉時代の館の形態をもっている。飯野氏の先祖伊賀氏が鎌倉幕府の重臣から好嶋(⑥)荘の預所として、着任以来、今日まで統一している居館であり、現在飯野氏は八幡神社の神主として現在に至っている。南北朝時代には武将として活躍し、預所と岩城氏の対立もあって、武士団ともあまりかわらなくなっていた。

この高月館は割合変化が少ない。飯野宅の周囲には土塁があり、南西にはその土塁に接して、磐城高校の敷地の境界には空堀がある。館内の建物は第二次大戦前に焼失したが、中世の館らしさは失われていない。東北部の崖には三段程の曲輪がある。磐城高校の敷地も周囲の崖は曲輪になっており、校門前は空堀りになって土橋になっていたそうである。土塁は残っていない。飯野八幡神社に磐城平城築城の折、平駅の北の台地端の物見ヶ岡から現在地に移築されたといわれてきた。しかし、創建当時の状態を示す八幡社の古地図にある一の鳥(⑦)居(神社前)、二の鳥居(松ヶ岡公園)、三の鳥居(小島の鳥居山)が飯野氏の居館が直線となり、鎌倉時代(⑧)の偏角と一致すること、八幡社前の馬場となった道路の長さが物見ヶ岡にはとれないこと、敷地内の建物の位置が古地図に合うことなどから飯野八幡神社は創建当時からこの場所に鎮座しようである。神社前の鳥居の両側には空堀があり、境内の周囲には一部破壊

されているが土塁に囲まれ、中央にも土塁が南北方向に一部残っている。境内全体が周囲より一段高くなっている。この周辺に荘園の政所があったようである。また、八幡神社の鳥居を中心とした道路は馬場であった神社前の八幡小路を除いて、全て細道であり、しかも直線ではない。また、交差点は全て丁字形で、直角には交わらない。それに行き止まり道も多い。そのために道路の見透しは極めて悪い。このため道路の通り抜けは困難となる。このため、住宅地としては鎌倉(倉市)とよく似た中世的な道路をもつ市街地となっている。またこの台地に接する谷頭侵蝕谷(胡摩沢、古鍛冶町)や沖積平野(七軒町、久保町、北目)も同様な道路形態をもっているが、胡摩沢には根古屋と呼ばれるところがあり、武家屋敷であった。また北目、久保町は短冊型の地割で市場町であったようである。

二 飯野平城

① 大館

頂上が本丸跡で、隋円形であり、中央に段のある狭い平坦地である。土塁が東端に一部残り、登り口は屈曲している。梨畑から公園になった折に手が増えられて本丸らしさはあまり感じられない。居館よりは結城のようである。稜線(本丸の南斜面、北西斜面)の特色は本丸に近いところや中腹に曲輪を作り下から登る敵を攻撃する。稜線の両側の斜面は急傾斜にして、稜線へは登りにくくしている。山脚はほぼ直角に切断し、削った土で、崖の下にも曲輪をつくる。また稜線の道路には土塁をもつものもある。谷斜面では中腹で削った土を山麓までおろし、曲輪を二つ以上作っている。本丸北東部の緩斜面は自然の段丘に加えて、人工の曲輪を階段状につくっている。空堀りは連続する丘陵の鞍部に作り、非連続にしている。必要に応じて土橋を作る。館の中の道路は緩斜面と急斜面との交換線附近や、高さのちがう曲輪と曲輪の接続するところを通る。地図では直線に表現されているが、実際は屈曲している。また道路は

曲輪群を従断することになるので道路の両側は土塁のようになっている。

このような斜面形態が連続する範囲を飯野平城の城域と考えた。

② 御台境

御台境の段丘は好間町田代原で飯野平と分岐する。大館の南に位置する舌状台地である。飯野平城の大館とは一〇メートルの距離であり、飯野平城の一部であると考えられる。一の矢神社には牛頭天皇が祭られている。また、常磐高速道からのバイパス道路が通過する工事で改変も著るしいが、城館の規模が大きいので、工事が大規模であっても容易に館の形態は失われない。最近、この御台の西南斜面の溜池の近くで横穴古墳群が発掘されたが、埋蔵品は全く発見されなかった。この城の築城のために斜面を急崖にしたときに、横穴古墳の入口附近が削りとられて、盗堀されて遺物は何にも発見されなかった。八反田にある七浜荘の東斜面は四段の曲輪群があり保存状態も極めて良い。また北斜面は谷頭侵食谷も崖を急傾斜にして登りにくくしている。御台は洪積台地であって平坦面が広く、水も地下水から得られる。一ノ矢神社を含めて、ある程度の大きさに区切られた住居跡らしい。この御台は地名から推測されるように、隠居場や家族の住居らしいが、前述の道路工事、宅地造成等で改変が著るしいので、発掘もできない。

③ 長興寺の段丘

長興寺は比高四〇メートルの独立した段丘面である。段丘面の南半分は墓地となり、西端に土塁が残っている。中央部は不規則な凹凸があり、庭園跡らしい。

北側は住宅地となっているが居宅跡らしい。北側の斜面は曲輪群が改変されずに残っている。

④ 寺町・火葬場（好間町大館）

この地区は江戸時代になって寺院が密集したが、中世には寺院はなかった。墓地の拡張のため改変されているが、寺や墓の後の竹藪や林の中に曲輪が残っていたり、墓地に段差があって、比較的大きな単位の平坦地がある。居館ならば絶好の場所となっていた。JR常磐線に沿う新町裏の崖は上の方に小さな細長い曲輪があって、墓地や大きな看板がたっている。その下は急崖となり、その下の削った土でできた低い段丘面には、岩城氏に仕えた可級武士の家敷が並んでいた。西側は病院などもできて、当時の復元はむづかしい。

この地区が飯野平城の中核となっていたようである。かつて、この地区と前述の大館は連続していたが、JR磐越東線、国道四九号線が堀削して分整したが、景観的にはあまり影響がないようである。

⑤ 松ヶ岡公園、良善寺

中央をJR常磐線と磐越東線が通り、松ヶ岡公園となり改変もあるが、良善寺の東から北にかけての崖、欣浄寺と菩提院の間の谷、公園内の赤橋の西ノ公園の南側の崖、公園の稲荷神社の南の崖などに多数の曲輪が残っている。古鍛冶町の崖などに多数の曲輪が残っている。古鍛冶町の松堂院は岩城氏の居館があったといわれている。

⑥ 物見ヶ岡、六間門

物見ヶ岡は江戸時代に城郭内になり、本丸、二ノ丸、三ノ丸、重臣の武家屋敷となっていた。かつては飯野八幡神社もここにあったといわれている。そうならば、現在でも、本丸跡とか、八幡台とか呼ばれるはずなのに、ここが今でも物見ヶ岡と呼ばれる飯野平城の物見であったようである。この物見ヶ岡にある平城の崖の特徴は今までの崖と同じく石垣はなく、削った崖と曲輪よりなっている。相違点は土塁の残存が多いことである。江戸時代の磐城平城は中世の飯野平城の崖を利用して、土塁、水濠、門の石垣を加えて、再構築したのである。

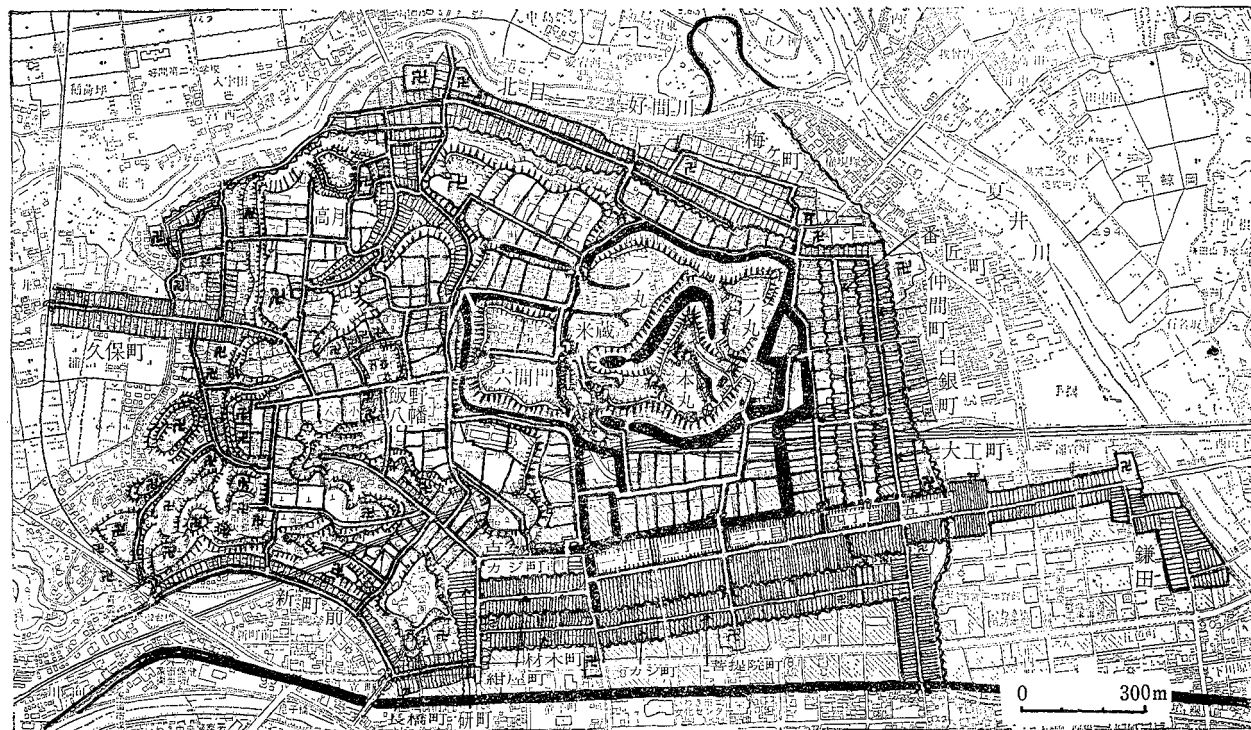


図5 磐城平城（享保年間）

⑦ 中世の城下町

結め城の居館は大館と考えられるが、大名一族と重臣の居館は御台、飯野平、古鎌治の松堂院などにあつて、下級武士は町の入口附近と崖下に並び分散していたようである。市場町は北目町、久保町、職人街は梅ヶ町、古鍛冶町など段丘崖下に分散していたようである。寺院もまとまっていなかった。

五 磐城平城（第5図）

江戸時代になって、鳥居忠政⁽¹⁰⁾が伏見城での活躍した父の後継として平藩主となり、磐城平城を飯野平城の中に再構築した。その都市造りは地図を見れば大体予想が可能である。まとめると次のようになる。

(1) 物見ヶ岡にある本丸を囲んで、沢山の濠をめぐらした。外側は好間川、夏井川、新川を利用した。中堀りはJR平駅を中心にして市街地のまん中を凹形に通り、武家屋敷と町人町との境界を兼ねていた。内堀りは駅の構内、県道、住宅街となったが、白蛇淵とともに丹後沢が残っている。土地割の変化が少ないので容易に復元が可能である。

(2) 城下町は直線の道路の両側に身分の同じ人々の宅地を短冊型に並ばせ、その町裏には堀・水路のある背割町であった。その直線の水路や道路は第一図の条里型地割と関係があるようである。城下町の南北の線は北白土や好間の方向と一致する。一方、東西を結ぶ基本となる本町通りは南南東—西南西に傾いている。鎌田で一〇〇メートル程、北に移動させたようである。足軽屋敷が分散しているが、岩城氏の時代の武家屋敷と大体一致しているようである。

(3) 郭内 この城の郭内は中世の館に土塁を足し、堀りをつくり、門や櫓を作った城なので、堀りを埋め、門や建物を破壊すると城のイメージは簡単になくなる。一方、土地割による復元は変化が少ないので、土地割を中心にする



図6 地籍図による平町（北目村）の土地利用図（1883）

城下町らしさは良く残っている。

六 地籍図(9)による明治初期の平町(第6図)

奥州戦争の折、この城で戦い二日程で西軍に敗れた。その折、城の役目はおわった。第6図は明治一五年作成の地籍図による北目村(平町)の復元図である。常磐線は十五年後の明治三〇年に開通した。

郭内は草地となり所有主不明とある。濠は畑となった四軒町を除き水田化して、濠の復元を容易にした。上級の武家屋敷は殆んど空地となり移転したことを示している。下級武家屋敷は残った家屋がある。武家屋敷跡の台地は畑、低地は水田となり、周辺農家の耕地となった。その耕地も石城郡の中心機能としてのサービス機関が立地するようにになると、平地の武家屋敷跡に、駅、郡役所、裁判所、刑務所、郵便局、町役場等が立地した。一方、会社や役所で働く人々の宅地化は、沖積平野は水害常習地帯であったので、城下町は拡大しなかった。台地にある城跡は農家にとっては高台で不便なものと水不足と簡単に手に入れた土地なので、簡単に手放した。その結果、この城跡には学校などもできたが、宅地化が急激に進行した。

現在は、手狭になった役所、デパートなどは新川沿いに移動して高層ビルが立ち並んでいる。商店街、駅前にも区劃が小さいためビルの建設は思うにまかせない。業務中心街も国道六号に沿って南側に移動した。駅前の再開発ビルの計画もあるが、自動車時代にあつて、ショッピングセンター等が郊外移動した。いわき市が三五万人を越えても、中心街が昔のままの形態を保っている。そのためあつて、土地割、道路形態等極めて中世的な都市形態を現在にまで残している。

七 まとめ

(1) 地形（主に崖）、土地割、道路等の特徴から歴史的景観の復元を福島県いわき市平の中世城館を調査した結果の報告である。

(2) 城館は丘陵、段丘の斜面を観察すれば範囲と規模がわかる。斜面を滑かに急傾斜に削り、その土で平坦面（曲輪）を作り、曲輪の上と下の崖をより急斜面にした曲輪群を作るのを基本としている。

(3) 調査の結果、白土城、飯野平城は一般に考えられているよりも大規模である。

(4) 白土城は南北朝期の山城であり、曲輪、虎口、空堀、土橋等、素朴な作りだが、山城の特徴をそなえている。

(4) 飯野は鎌倉時代の高月館、戦国期の飯野平城、江戸時代の磐城平城の三つの違う時代の城を包含する。高月館は道路が変形三叉路と屈折路、行止まりとなって見透しと通過を困難にしている。飯野平城は詰城をもち、規模も大きく、曲輪群も豊富である。磐城平城は飯野平城の物見ヶ岡に築城した。この城は石垣はなく飯野平城の崖を利用した。数多い水濠と直線的な背割町がこの城の特色である。また、この城下町の南北の道路は条里の線と一致している。

(6) 中世の城下町は現在でも市街地となっておりところも多い。これらは段丘の麓と谷頭侵食谷に分散して分布する。根古屋集落と思われる不規則な土地割と短冊型の市場町がみられる。

(7) 磐城平城は戊辰戦争の折、落城した。地籍図により復元図を作った結果、郭内の建物はなくなり、台地は草地と畑となり、低地の濠と武家屋敷は水田となった。それら耕地はやや遠方の農家の所有となり、生産力もないので簡

単に手放した。その結果、台地は住宅地、低地は平駅などができて、城下町らしさはみられなくなった。

古代の条里、鎌倉時代の荘園の領主の高月館と飯野八幡宮、南北朝期の白土城、戦国期の飯野平城、江戸時代の磐城平城等が各時代のいわき地方の中心機能をもっていた。それらの歴史的景観が現在の市街地の形成要素となっている。現在のも平いわき市の中心機能をもち続けているのは貴重である。

注

- (1) 拙著、いわきの条里制遺構調査報告書、一九八四、三月、福島県いわき市教育委員会
- (2) 佐藤孝徳「好嶋庄と岩城氏」福島の研究古代中世編 清文堂
- (3) 岩城常隆は白河、田村、那須、佐竹江戸の各家を支配下において、岩城家最大の募力圏を作りだした。前掲(2)による。
- (4) 地元では大館の頂上附近のみを城として考えている。飯野平城ともあまりいわれていない。
- (5) 本来は独立した館だが、明応六年(一四九七)頃より、飯野氏は岩城氏に従属するようになり、飯野平城の中に含まれるようになる。
- (6) 中世の飯野文書、近世文書多数所蔵
- (7) 山名隅弘「飯野八幡宮社地の一考察」福島史学研究 四六号
- (8) 安田初雄「飯野八幡宮境内古図と偏角の永年変化」潮流十一 いわき地域学会
- (9) 福島市にある県文化センター資料館所蔵